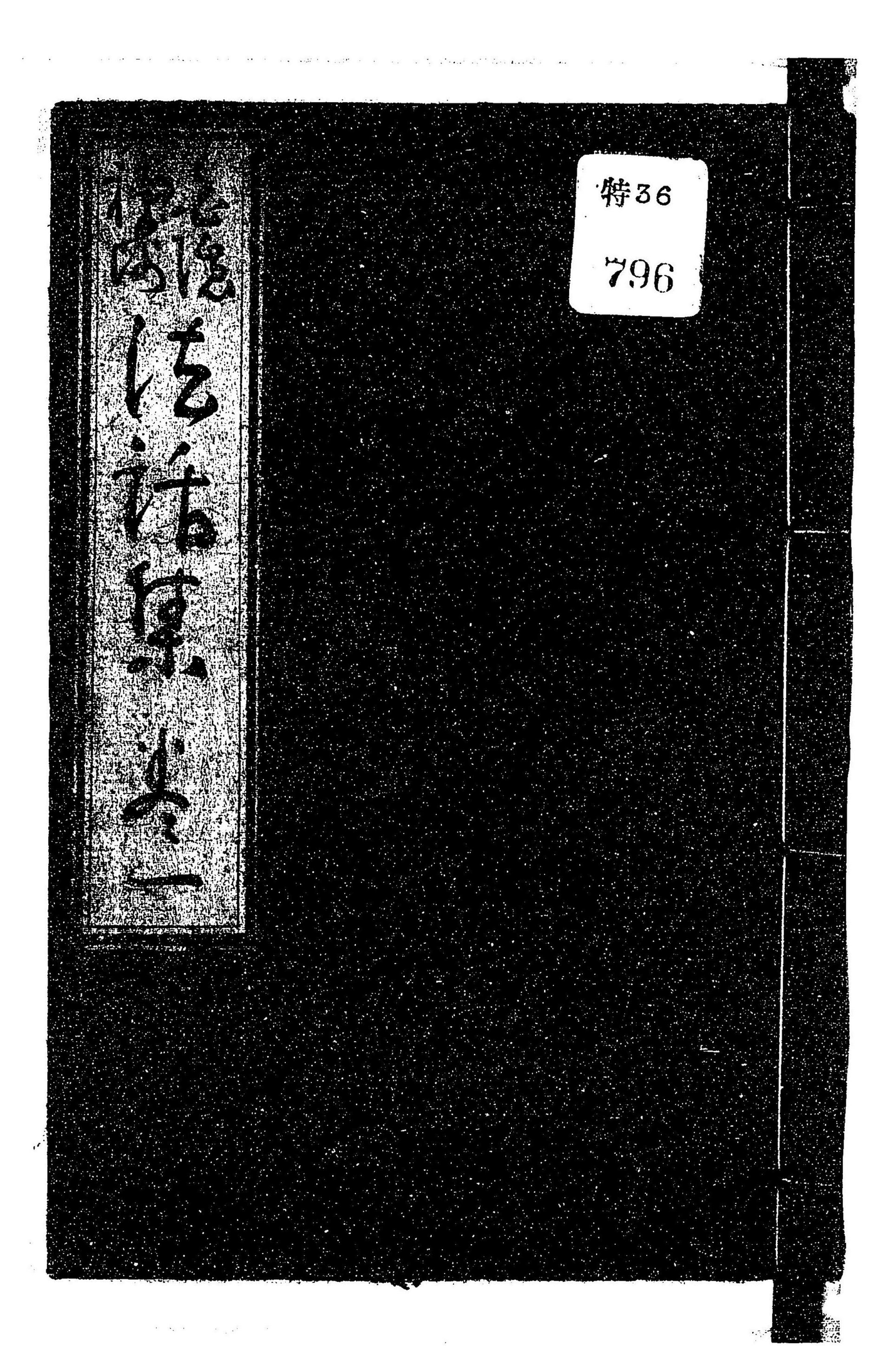


特36
796

019795-001-7

特36-796

白隱禪師法話集

小川 多左衛門／編

M27. 6

ABG-0616

戯言細語

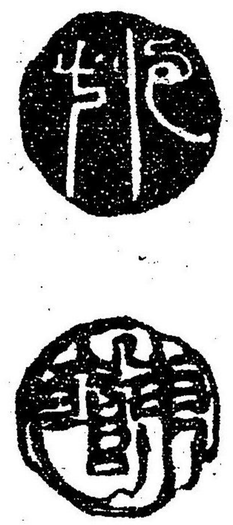
第一義

呪法説譬説耶先師過古
神ミ後舌鈍識懵恐法祖
不及ニ初機依且丙寅ノ夏

孜々編書名曰辻詻錢不
禮六道衢欄是菩薩道
場不起禪定能入同事
摂者即衲僧轉身自在
之活路亦眼然茲合粉引
歌舞附梓岩普施初心
道友永為當来之資
糧矣囑々

明和庚寅夏豆東嶺

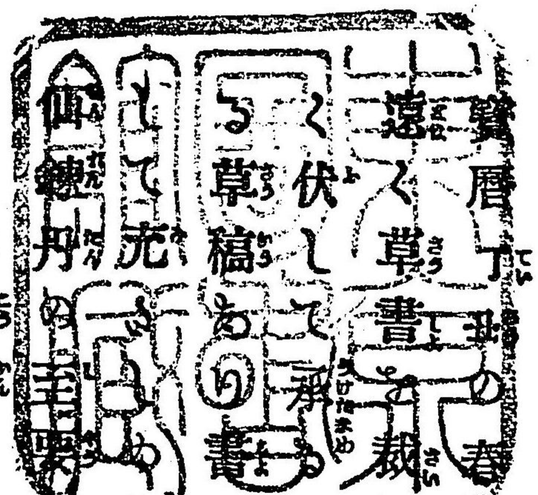
於洛東翫月亭書



白隱禪師 法話集卷ノ一

夜船閑話序

窮乏菴主饑凍選



贊曆丁丑の春長安の書肆松月堂何某とかや聞へ遠く草書を裁して吾が鵠林近侍の左右に寄せて云て伏して承る老師の古紙堆中夜船閑話とゐや云へる草稿あり書中多く氣を鍊り精を養ひ人の警衛を專ら長生久視の秘訣を聚む謂ゆる神仙丹の主要なりと是故に世の好事の君子是をおもふ事荒旱の雲霓の如し偶々雲水の徒侶竊かに傳寫し來るあるも秘重し珍藏して人をして見せしめず天飄むなしく櫃におさめて匿しさるが如し願く

は是を梓に壽がふして以て其渇を慰せん聞く老師常に人を利するを以て老後を樂しゝ玉ふと若夫人に利あらば師豈に是を吝しゝ玉わんやと二虎合ゝ來て師に呈す師微々として笑ふ此において諸子舊書櫃を開けば草稿蠹魚の腹中に葬らるゝ者中葉に過ぎり諸子即ち訂正傳寫して既に五十來紙を見る即ち封裏して以て京師に寄せんとゝ予が馬齒一日も諸子に長ぜるを以て其端由を書せん事を責む予も亦辭せずして出す云く師鵠林に住する事大凡四十年鉢囊を掛けしより以來雲水參玄の布衲子纔かに門閾に跨れば師の毒涎を甘なひ痛棒を滋しとして辭し去る事を忘るゝ者或は十年或ハ二十年鵠林

々下の塵と成る事も亦總に顧みざる底あり盡く是叢林の頭角四方の精英なり各々西東五六里が間に分れて舊舍廢宅老院破廟借て以て菴居の處として清苦す朝艱暮辛盡餒夜凍口に投する者は茶葉麥麩耳に觸るゝ者は熱喝垢罵骨に徹する者は嗔拳痛棒見る者額攢め聞者肌汗す鬼神もはた涙を浮へつべく魔外もはゞ掌を合せつべし其初め來る時は宋玉河晏が美貌有て肌膚光澤凝れる膏の如くなる者も久しからぎして恰も杜甫賈嶋の形容枯稿顏色憔悴するが如く或は屈子に澤畔に逢ふか如し參玄軀命を顧ざる底の勇猛の上士にあらざるよりんば何の樂しゝ有てゝ片時も湊泊する事を得んや是故に往

々に參窮度に過ぎ清苦節を失する族は肺金いふ
かじけ水分枯渇して疝癖塊痛難治の重症を發せん
とす是を憐ミ是を愁て師不豫の色有間者連日作ち
忍俊不禁にして雲頭を按下し老婆の臭乳を絞つて
是に授るに内觀の秘訣を以てす乃ひ云々若し是參
禪辨道の工士心火逆上し身心勞疲し五内調和せざ
る事あらんに鍼灸藥のミつを以て是を治せんと欲
せば縱ひ華陀扁倉と云へども輙く救ひ得る事能わ
じ我に仙人還丹の秘訣あり你が輩が試ミに是を
修せよ奇功を見る事雲霧を披ひて皎日を見るが如
けん若し此秘要を修せんと欲せば且らく工夫を拋
下し話頭を括放して先須らく熟睡一覺すべし其未
だ睡りにつかず眼を合せざる以前に向て長かく両
脚を展べ強よく蹈ミそろへ一身の元氣をして臍輪
氣海丹田腰脚足心の間に充ふしめ時々に此觀を成
すべし我此の氣海丹田腰脚足心總に是我が本來の
面目々々何の鼻孔かある我か此の氣海丹せ總に是
れ我が本分の家郷々々何の消息かある我が此の氣
海丹田總に是我ふ唯心の淨土々々何の莊嚴かある
我が此の氣海丹田總に是我か已身の彌陀々々何の
法をふ說くと打返へしん々々常に斯の如く妄想すべ
し妄想の功果つもらば一身の元氣いつしか腰脚足
心の間に充足して臍下瓠然ふる事いまた篠打ちせ
ざる鞠の如けん恁麼に單々に妄想し持ち去て五日

七日乃至二三七日を經さらむに從前の五積六聚氣虚勞役等の諸症底を拂て平癒せゞんば老僧か頭を切り特ち去れ此におゐて諸子歡喜作禮して密に精修す各々悉く不思議の奇功を見る功の遲速は進修の精麁に依るといへども大半皆全快す各々内觀の奇功を讃嘆して休まず師の曰く你か輩心病全快を得て以て足れりとする事なかれ轉々治せば轉々參ぜよ轉々悟らば轉々進め老僧初め參學の時難治の重病を發して其憂苦諸子に十倍せり進退惟谷はる尋常心にひそかに思惟すらく生きて此憂愁に沈まんよりは如かじ早死して此革囊を捨んにはと何の幸ぞや此の内觀の秘訣をつさへて全快を得る事今の諸子の如し至人の云く此は是神仙長生不死の神術なり中下は世壽三百歳なるべし其餘は計り定むべからず予則ち歡喜に堪へゞ精修怠らざる者大凡三年心身次第に健康に氣力次第に勇壯なる事を覺ふ此において重ねて心に竊に謂へらく縱ひ此眞悟を修し得て彭祖か八百の歳時を保ち得るを唯是一箇頑空無智の守尻鬼おらくのミ老狸の舊窠に睡るか如し終に壞滅に歸せん何か故ぞ今既に獨りも葛洪鐵楞張華費張か輩を見ゞ如かじ四弘の大誓を憤起し菩薩の威儀を學び常に大法施を行し虚空に先つて死せゞ虚空に後れて生ぜざる底の不退堅固の眞法身を打殺し金剛不壞の大仙身を成就せんに

はと此において眞正參玄の上士兩三輩を得て內觀と參禪と共に合せ並らべ貯へて且つ耕へし且つ戰ふ者蓋し茲に三十年年々一員を添へ二肩を增し得て今既に二百衆に近かし其中間方來の衲子勞屈疲倦の族ら或は心火逆上し正に發狂せんとする底を憐ミ密かに此內觀の至要を傳授し立所に快癒せしめ轉々悟れば轉々進はしむ馬年今歲古稀に越へたりと云へども半點の病患なく齒牙全く搖落せざ眼耳次第に分明にして動もすれば鬚鬟を忘る每月兩度の法施終に怠倦せざ請に侘方に應じて三百五百の海衆を聚會して或は五句七句を經に錄に雲水の所望に隨て胡說亂道する者大凡五六十會に及ふと云へども終に一日も罷講齋を鎖さざ身心健康氣力は次第に二三十歲の時に遙かに勝されり是皆彼の內觀の奇功に依る事を覺ふ住菴の諸子各々悲泣作禮して云く吾が師大慈大悲願くば內觀の大畧を書せよ書して留めて後來禪病疲倦吾か輩の如き者を救へ師卽ち領す立處に草稿成る稿中何の說く處ぞ曰く大凡生を養ひ長壽を保つの要形を鍊るにしかざ形を鍊るの要神氣をして丹田氣海の間に凝らさしむるにあり神凝る則は氣聚る々々る則は卽ち眞丹成る丹成る則は形固し形固き則は神全し神全き則は壽かし是仙人九轉還丹の秘訣に契へり須らく知るべし丹は果して外物に非ざる事を千葛唯心火

を降下し氣海丹田の間に充たしむるに有るらくのミ住菴の諸子此心要を勤めてはけみ進んで怠らざんば禪病を治し勞疲を救ふのみにあらざ禪門向上の事に到て年來疑團あらむ人々は大ひに手を拍して大笑する底の大歡喜有らむ何か故ぞ月高して城影盡く

惟時寶曆丁丑孟正廿五莫

窮乏菴主飢凍粧香稽首題

夜船閑話

山野初め參學の日誓つて勇猛の信心を憤發し不退の道情を激起し精錬刻苦する者既に両三霜乍ち一夜忽然として落節す從前多少の疑惑根に和して氷融し曠却生死の業根底に徹して溫滅す自ら謂らく道ち人を去る事寔に遠からざ古人二三十年是何の揑怪ぞと怡悅蹈舞を忘るゝ者數月向後日用を廻顧するに動靜の二境全く調和せゝ去就の両邊總に脫洒ならゝ自ら謂らく猛く精彩を着ゞ重ねて一回捨命し去んと越ひて牙關を咬定し雙眼晴を瞪開し寢食ともに廢せんとゝ既にして未だ期月に亘らざるに心火逆上し肺金焦枯して雙脚氷雪の底に浸する

如く両耳溪聲の間を行くか如し肝膽常に怯弱にして擧措恐怖多く心神困倦し寐寤種々の境界を見る両腋常に汗を生じ両眼常に涙を帶ぶ此におゐて遍く明師に投し廣く名醫を探ると云へども百藥寸功なし或人曰く城の白河の山裏に巖居せる者あり世人此を名けて白幽先生と云ふ靈壽三四甲子を閲みし人居三四里程を隔つ人を見る事を好まゝ行く則は必ず走て避く人其賢愚を辨する事なし里人專ら稱して仙人とゝ聞く故の丈山氏の師範にして精く天文に通じ深く醫道に達す人あり禮を盡して咨叩する則は稀れに微言を吐く退ひて是を考るに大ひに人に利ありと此において寶永第七庚寅孟正中院

縞らに行纏を着け濃東を發し黒谷を越へ直ちに白川の邑に到り包を茶店におろして幽か巖栖の處を尋ね黒人遥かに一枝の溪水を指す即ち波の水聲に隨て遥かに山溪より入る正より行く事里ばかりより作ち流水を蹈斷す樵徑もまゝなし時に一老夫あり遥かに雲煙の間を指す黄白よりして方寸餘なる者あり山氣に隨て或は顯われ或は隱る是幽か洞口に垂下する所の蘆簾なりと予即ち裳を褰けて上る巉巖を蹈み蒙茸を披けば氷雪草鞋を咬み雲露衲衣を壓す辛汗を滴て苦膏を流して漸く彼の蘆簾の處に到れは風致清絶實に物表に丁々たる事を覺ふ心魂震ひ恐れ飢膚戰栗に且らく巖根に倚て數息する者數百少

焉つて衣を振ひ襟を正し、して畏づく鞠躬して簾子の中を望めば矇矇朧朧として幽か目を収めて端座するを見る蒼髪座膝に到り朱顔麗ふして褒の如し大布の袍を掛けて輭草の席に坐せり窟中纔に方五六劔に過して全く資生の具無し机上只中庸と老子と金剛般若とを置く予則ち禮を盡して苦ろに病因を告げ且つ救ひを請ふ少焉幽眼を開ひて熟々視て徐々として告げて曰く我は是山中半死の陳人櫨栗を拾て食ひ麋鹿に伴つて睡る此外更に何をか知らんや自ら愧つ遠く上人の來望を勞する事を予即ち轉々咨叩して休まん時に幽恬如として予の手を捉らへて精しく五内を窺ひ九候を察す爪甲長こと半寸慘々乎として顙攢めてつげて云く已哉觀理度に過き進修節を失して終に此の重症を發す實に醫治し難き者は公の禪病なり若し鍼灸藥の三つの物を恃んで而して後に是を救わむと欲せば扁倉力をつくし華陀顙を攢むるも奇功を見る事能はじ公今既に觀理の爲に破られ勤めて内觀の功を積まざんは終に起つ事能はじ是波の起倒は必らず地に依るの謂なり予か曰く願くは内觀の要秘を聞かん學びかてらに是を修せん幽粛々如として容をあらため從容として告て曰く嗚呼公の如きは問ふ事を好むの士なり我が昔し聞けれ處を以て微しく公に告んか是養生の秘訣にして人の知る事稀れなり怠らざんば必ず

奇功を見久視もまゝ期しつべし夫大道分れて両儀あり陰陽交和して人物生る先天の元氣中間に默運して五臓列り經脉行われ衛氣營血互に昇降循環す る者晝夜に大凡五十度肺金は牝藏にして膈上に浮び肝木は牡藏にして膈下に沈づむ心火は大陽にして上部に位ひし腎水は大陰にして下部を占む五臓に七神あり脾腎各々二神を藏くす呼は心肺より出て吸は腎肝に入る一呼に脉の行く事三寸一吸に脉の行く事三寸晝夜に一萬三千五百の氣息あり脉一身を巡行する事五十次火は輕浮にしてつねに騰昇を好ミ水は沈重にして常に下流を務む若人察せず觀照或は節を失し志念或は度に過る則は心火熾衝して肺金焦薄す金母苦るしむ則は水子衰減す母子互に疲傷して五位困倦し六屬凌奪す四大增損して各々百一の病を生ゝ百藥功を立する事能わざ衆醫総に手を束かねて終に告る處なきに到る盍し生を養ふ事ハ國を守るが如し明君聖主は常に心を下に專にし暗君庸主は常に心を上に恣にす上に恣にする則は九卿權に誇り百僚寵を恃んで昏て民間の窮困を顧る事無し野に菜色多く國餓莩多し賢良潛ミ竄れ臣民瞋り恨む諸侯離れ叛き衆夷競ひ起つて終に民庶を塗炭にし國脉永く斷絶するに到る心を下に專らにする則は九卿儉を守り百僚約を勤めて常に民間の勞疲を忘るゝ事無し農に餘まんの粟あり

婦に餘まんの布有て群賢來り屬し諸侯恐れ服して民肥へ國强く金に違するの烝民なく境ひを侵すの敵國なし國小斗の聲を聞く事なく民戈戟の名を知らず人身もはゝ然り至人は常に心氣沒して下に充たしむ心氣下に充つる則は七凶內に動く事なく四邪はゝ外より窺ふ事能ハざ營衛充ち心神健かなり口ち終に藥餌の甘酸を知らざ身終に鍼灸の痛痒を受けず庸流は常に心氣をして上に淫にす上に淫にする則は左寸の火右水の金を尅して五官縮まり疲れ六親苦るしゝ恨む是故に漆園曰く眞人の息は是を息ずるに踵を以てし衆人の息は是を息するに喉を以てす許俊が云く蓋し氣下焦に在る則は其息遠く氣上焦に有る則は其息促まる上陽子が曰く人は眞一の氣有り丹田の中に降下する則は一陽まゝ復す若人始陽初復の候を知らむと欲せば暖氣を以て是が信とすべし大凡生を養ふの道上部は常に清涼ならん事を要し下部は常に温煖ならん事を要せよ夫經脉の十二は支の十二に配し月の十二に應し時の十二に合す六爻變化再周して一歲を全ふするが如し五陰上に居し一陽下を占む是を地雷復と云ふ冬至の候なり眞人の息は是を息するに踵を以てするの謂ふ三陽下に位ひし三陰上に居す是を地天泰と云ふ孟正の候なり萬物發生の氣を含んて百卉春化の澤を受く至人元氣にして下に充たしむるの象

人是を得る則は營衛充實し氣力勇壯なり五陰下に居し一陽上に止まる是を山地剝と云ふ九月の候なり天是を得る則は林苑色を失し百卉荒落す是衆人の息は是を息するに喉を以てするの象人是を得る則は形容枯槁し齒牙搖き落ち所以に延壽書に云く六陽共に盡く則是全陰の人死し易すし須らく知るべし元氣をして常に下に充たしむ是生を養ふ樞要なる事を昔志吳契初石臺先生に見ゆ齋戒志て錬丹の術を問ふ先生の云く我に元玄眞丹の神秘あり上々の器にあらざるよりんは得て傳ふべからざ古志へ黃成子是を以て黃帝に傳ふ帝三七齋戒して是を受く夫大道の外に眞丹なく眞丹の外に大道なし蓋し五無漏の法あり你ぢの六欲を去け五官各々其職を忘るゝ則は混然たる本源の眞氣彷彿として目前に充つ是彼の大白道人の謂ゆる我が天を以て事る所の天に合する者なり孟軻氏の謂ゆる浩然の氣是をひきひて臍輪氣海丹田の間に藏めて歲月を重ねて是を守て守一にし去り是を養て無適にし去て一朝作ち丹竈を掀翻する則は內外中間は紘四維總是一枚の大還丹此時に當て初て自己即ち是天地に先つて生ぜざ虛空に後れて死せざる底の眞箇長生久視の大神仙なる事を覺得せん是を眞正丹竈功成る底の時節とに豈に風に御し霞に跨がり地を縮め水を蹈む等の鎖末なる幻事を以て懷とする者ならん

や大洋を攪ひて酥酪とし厚土を變じて黃金とした前賢曰く丹は丹田なり液は肺液なり肺液を以て丹田に還へす是故に金液還丹と云ふ予が曰く謹んで命を聞いつ且らく禪觀を抛下し努め力めて治するを以て期とせん恐るゝ處は李士才が謂ゆる清降に偏へなる者にあらずや心を一處に制せば氣血或ひは滯碍する事なからむか幽微ひとして笑て云く然らず李氏云わざや火の性は炎上なり宜しく是を下らしむべし水の性は下れるに就く宜しく是をして上らしむべし水上り火下る是を名けて交と云ふ交る則は既濟とし交らざる則は未濟とす交は生の象不交は死の象なり李家が謂ゆる清降に偏かりとは丹溪を學ふ者の弊を救はむとなり古人云く相火上り易きは身中の苦るしむ所水を補ふは火を制する所以なり蓋し火に君相の二義あり君火は上に居して靜を主さどり相火は下に處して動をつかさどる君火是一心の主なり相火は宰輔ふり蓋し相火に兩般あり謂ゆる腎と肝となり肝は雷に比し賢は龍に比した是故に云ふ龍をして海底に歸せしめば必ず迅發の雷なけん但し雷をして澤中に藏れしめば必ず飛騰の龍なけん海ゝ澤か水にあらずと云ふ事なし是相火上り易きを制するの語にあらづや又曰く心勞煩する則は虛して心熱す心虛する則は是を補するに心を下して以て腎に交ゆ是を補と云ふ既濟の道な

り公先に心火逆上して此重痾を發す若し心を降下せすんば縱ひ三界の秘密を行し盡しゝり共起つ事得し且つ又我が形た摸道家者流に類するを以て大ひに釋に異なる者とするか是禪なり佗日打發せば大ひに笑つべきの事有らむ夫觀は無觀を以て正觀とす多觀の者を邪觀とす向さに公多觀を以て此重症を見る今是を救ふに無觀を以てすはた可ならず や公若し心炎意火を收めて丹田及び足心の間におかば胸膈自然に清涼にして一點の計較思想なく一滴の識浪情波なけん是眞觀清淨觀なり云ふ事なかれしばらく禪觀を拋下せんと佛の言はく心を足心よりおさめて能く百一の病を治すと阿含に酥を用る の法あり心の勞疲を救ふ事尤妙なり天台の摩訶止觀に病因を論ぜる事甚だ盡せり治法を說く事亦甚だ精密なり十二種の息ありよく衆病を治し臍輪を繰して豆子を見るの法あり其大意心火を降下して丹田及び足心に收るを以て至要とす但病を治するのみにあらず大ひに禪觀を助すゝ蓋し繫緣諦眞の二止あり諦眞は實相の圓觀繫緣は心氣を臍輪氣海丹田の間に收め守るを以て第一とす行者是を用る に大ひに利あり古しへ永平の開祖師大宋に入て如淨を天童に拜す師一日密室に入て益を請ふ淨曰く元子坐禪の時き心を左の掌の上におくべしと是即ち顯師の謂ゆる繫緣止の大畧なり顯師初め此の繫

緣內觀の秘訣を教へて其家兄鎭愼が重痾を萬死の中に助け救ひ玉ふ事は精しくは小止觀の中に說けり又白雲和尙曰く我つねに心をして腔子の中に充さしむ徒を匡し衆を領し賓を接し機に應じ及ひ小參普說七縱八橫の間において是を用ひてつくる事なし老來殊に利益多き事を覺ふと寔に貴ふべし是蓋し素問にみゆる恬澹虛無なれば眞氣是にしふが ふ精神內に守らば病何れより來らむと云ふ語に本づき玉ふ者ならむ且つ夫れ內に守るの要元氣を して一身の中に充塞せしめ三百六十の骨節八萬四千の毛竅一毫髮ばかりも欠缺の處なからしめん事を要す是生を養ふ至要なる事を知るべし彭祖が曰く和神導氣の法當さに深く密室を鎖ぎし牀を案し席を煖め枕の高さ二寸半正身偃臥し瞑目して心氣を胸臍の中に閉ぎし鴻毛を以て鼻上につけて動かざる事三百息を經て耳聞處なく目見る處なく斯の如くなる則は寒暑も侵かす事能はず蜂蠆も毒する事能わず壽き三百六十歲是眞人に近かしと又蘇內翰が曰く已に飢へて方に食し未だ飽すして先止む散步逍遙して務めて腹をして空からしめ腹の空なる時に當て卽ち靜室に入り端坐默然して出入の息を數へよ一息よりそへて十に到り十より數へて百に至り百より數へ放ち去て千に到て此身兀然として此心寂然ふる事虛空と等し斯の如くおる事

久しふして一息おのづから止まる出でゞ入らざる時此息は萬四千の毛竅の中より雲蒸し霧起るが如し無始劫來の諸病自除き諸障自然に除滅する事を明悟せん譬へば盲人の忽然として眼を開くが如くん此時人に尋ねて路頭を指す事を用ひず只要す尋常言語を省畧して爾ぢの元氣を長養せん事を是故に云ふ目力を養ふ者は常に瞑し耳根を養ふ者は常に飽き心氣を養ふ者は常に默すと予が曰く酥を用る の法得て聞ひつべしや幽が曰く行者定中四大調和せず身心ともに勞疲する事を覺せば心を起して應さに想を成すべし譬へば色香清淨の鞭蘇鴨卵の大ひさの如くなる者頂上に頓在せんに其氣味微妙にして遍く頭顱の間をうるおし浸々として潤下し來て両肩及び雙臂両乳胸脇の間肺肝腸胃脊梁臀骨次第に活注し將ち盡る此時に當て胸中の五積六聚疝癖塊痛心に隨て降下する事水の下につくが如く歷々として聲あり遍身を周流し雙脚を温潤し足心に至て即ち止む行者再ひ應さに此觀を成すべし彼の浸々として潤下する所の餘流積もり湛へて暖め蘸す事恰も世の良醫の種々妙香の藥物を集め是を煎湯して浴盤の中に盛り湛へて我が臍輪已下を漬け蘸す如し此觀をなすとき唯心所現の故に鼻根乍ち希有の香氣を聞き身根俄かに妙好の鞭觸を受く身心調適なる事二三十歳の時には遙に勝れり此

時に當て積聚を消融し腸胃を調和し覺へず肌膚光澤を生ぜ若其勤めて怠らざんば何れの病か治せざらむ何れの德かつはさらむ何れの仙か成せざる何れの道か成せざる其功驗の遲速は行人の進修の精麁に依るらくのみ走始め卅歳の時多病にして公の患ひに十倍しき衆醫總に顧みざるに到る百端を窮むといへども救ふべきの術なし此において上下の神祇に祈て天仙の冥助を請ひ願ふ何の幸ひぞや計らざも此の輭酥の妙術を傳受する事を歡喜に堪へ兆綿々として精修す未だ期月ならざれに衆病大半消除す爾來身心輕安なる事を覺ゆるのみ癡々兀々月の大小を記せに年の潤餘を知らに世念次第に輕微にして人欲の舊習をいにしへを忘れるが如し馬年今歳何十歳なる事も知らざ中に端由有て若丹の山中に潛遁する者大凡三十歳世人都て知る事なし其中間を顧るに恰も黄粱半熟の一夢の如し今此山中無人の處に向て此枯稿の一具骨を放て大布の單衣纔かに二三片を掛ゆ嚴冬の寒威綿を折くの夜といへども枯腸を凍損するにいたらに山粒すでに斷へて殺氣を受けざる事動もすれば數月に及ぶといへども終に凍餒の覺へも無き事は皆此觀の力ならずや我今既に公に告るに一生用ひ盡さざる底の秘訣を以てす此外更に何をか云んやと云て目を收めて默坐に予も亦る涙を含んで禮辭す徐々と

して洞口を下れば木末繚かに殘暘を掛く時に履聲の丁々として山谷に答ふるあり且驚き且怪んで長つく回顧すれば遙かに幽が巖窟を離れ自ら送り來るを見る即ち曰く人迹不到の山路西東分ち難し恐くば歸客を惱さん老夫しばらく皈程を導んと云て大駒屐を着け瘦藤杖をひき巉巖を蹈み嶮岨を陟る事颯々として坦途を行くが如く談笑して先驅す山路遙かに里許を下て彼溪水の處に到て即ち曰く此の流水に隨ひ下らば必ず白川の邑に到らむと云て慘然として別る且らく柴立して幽が回歩を目送るに其老歩の勇壯なる事颯然として世を遁れて羽化して登仙する人の如し且羨み且敬す自恨む世を終るまで此等の人に隨逐する事能はざる事を徐々として歸り來て時々は彼の内觀を潛修するよ纔かに三年に充たさるに從前の衆病藥餌を用ひず鍼灸を假らず任運に除遣す特り病久治するのみにあらず從前手脚を挾む事得ず齒牙を下す事得ざる底の難信難透難解難人底の一着子根に透り底に徹して透得過して大歡喜を得る者大凡六七回其餘の小悟怡悅蹈舞を忘るゝ者數をしらず妙喜の謂ゆる大悟十八度小悟數を知らずと初て知る寔に我を欺かざる事を古へ二三綱の襪を着くと云へども足心常に氷雪の底に浸すが如くなる者今既に三冬嚴寒の日と云へども襪せざ爐せざ馬齒既でに古稀を越へゝ

りと云へとも指すべき半點の小病もはさなき事は彼の神術の餘勳ならんか云ふ事なかれ鵠林半死の殘喘多少無義荒唐の妄談を記取して以て他の土流を訛惑すと是宿とに靈骨有て一槌に既に成する底の俊流の爲めに設くるにあらざ癡鈍予が如く勞病予に類ひする底看讀して子細に觀察せば必ず少し き補ひならんか只恐る別人の手を拍して大笑せん事を何が故ぞ馬枯箕を咬んて午枕に喧びすし

白隱禪師施行歌

今生富貴する人は。前世より蒔おく種がある。今生なりとこしせぬ人は。未來はきもめて貧なるぞ。利口で富貴がなるならば。鈍なる人はみなひんな。利口で貧乏するを見よ。この世は前世の種次第。未來はこの世のたね次第。ふうき大小ある事は。蒔たね大小あるゆゑぞ。この世はもづゐの物なれば。よい種をらんてはきたまへ。ふねを惜みてうゑざれば。穀物とりさる例なし。田畑に麥稗まかずして。麥ひえ取たるさめしなし。むきひえ一升はきおけば。五升や一斗はみのるぞやし。かればすこしの施しも。果報は倍〳〵あるものぞ。況やほどこしおかければ。くハかうも多しと斗しれ。そ

れゆゑお釋迦も觀音も。施しせよとすゝめゝり。さすれば乞食非人まで。救ふこゝろを發すべし。おの〳〵富貴で持さから。有はあるほどゝらぬもの。たゞくの寶をゆつるとも。持子が持ねば持ぬもの。少も田畑ゆづらねど。持子はあつはれ持ものぞ。我子の繁昌祈るなら。人を倒さど施行せよ。人をたをしてもつさから。我子にゆづりて怨となる。ひとの恨のかゝるもの。ゆゑる我子が沈こきる。升や秤や算盤や。筆の非道をし給ふは。常〳〵商ひするひとゝ。あまり非道な利をとると。死んで三途に入る事ぞ。其身は三途に落入て。屋敷は草木が生蓄る。非道は子孫の害となる。親の惡事が身に酬ふ。世間に數〳〵有物ぞ。一門繁昌する事は。親が惡事をせぬゆゑぞ。若又親にはおれねば。ますく重恩思ひしれ。子を慈しむ親どゝろ。荒ひ風をゝ厭ひしぞ。それやど親に思はれて。親を思はぬたろかさよ。れやに不孝な人〳〵は。鳶や烏に劣りたり。娘むす子をしつけるに。惜むさからはなきものぞ。親の後生の爲ならば。其金出して施行せよ。飢死ぬ人を助けなは是に勝れる善事なし。さとひ万貫長者でも死んで身につく物はなし。妻を子供もぜに金も。捨て冥途の旅立ぞ。冥途の旅立する時は。耳をきこへず目を見へず。行衛しらすに門をいて。闇をやみぢに入ことぞ。其時後悔かぎりなし。兎角命のあるかぎり。菩提の種をうゑさまへ。命ハ脆きものなれは。露の命と名つけさり。

今胃頭痛る仕初めて。九死一生なるもあり。强い自慢をする人も。暮に頓死をするもあり。けふは他人を葬禮し。明日は我身の葬禮そ。然れは頼みなき婆婆よ。金銀蓄へなよゝする。富貴幸ひ有人は。貧者よ施しせらるべし。貧者に施しせぬ人は富貴てくらしたかひもなし。狗ても口はすぐるそや。飢人貧者を助くべし。慈悲善根は其儘に。家繁榮の御祈禱そ。慈悲善根をする人は。神や佛にまもられて。天魔外道はより付ず。然れば祈禱になるまひる。よく〳〵了簡せらるべし。惠施しからぬとは餘りどうよく目にあまる。肌死ぬ貧者を見ぬ振に。暮すこゝろは鬼神か。慈悲善根のなき人は子孫はんじやう長からじ。寶は餘りはかきそのそ。施行で借錢し初めよ。それこそ眞の信心よ。上さる人をはじめとし。頭立たるひとくは。われもくと共くに厚く施行に身を入れよ。貧者の命救ふなら。廣大無邊の善事也。平生貧者に敬はれ。身につく果報有まいか。人の喰物すつるのを。好んで拾ふてくう物は。前世に蒔種さらぬゆゑ。是非なく袖乞する事そ。かゝる有樣見ながらも。おの〳〵仁心起らぬか。とにもかくにも人として。信心なければ人でなし。此節信心おこらねば。全牛馬にことおなじ。

施行歌終

安心法興利多々記之序

此書を零餘鞨と名号事自己來源臘月八日の煤拂にして頓て西方淨土の春に立歸るべきこゝろおるべし洛西祥光寺の俊風和尚は淨土門の碩德にして例ら顯蜜禪に通ぜ一と世駿州原の白隱禪師に謁して問答數段の上一首の道歌を呈せらる

色を耳に見て隻手の聲を目にや聞らんれを賞して和尚の深く六字の淵源に徹するを證明し一肩の僧伽梨を附し又書を戲作して贈り申されける今両師既に羅化ありて年あり空しく紙魚の餌とおさむも心おきに似るりよて櫻木にちりはめて稱名懈怠の眠りを覺さん事をはかるものなら

安永三年春三月下旬

白隱禪師作

安心やこりゝ〳〵記

歸命頂禮御釋迦如來○やれ〳〵皆さん聞ても訓れひ○おらが親仁を何國の御人も○悉多太子かしらぬが佛ゝ○若ひ時から商ひ好にて○親の讓りの家を位もすやんと打すて○十九の年ら山へはいりて○迦蘭羅阿羅々の二人の仙人師匠と賴ミて菜摘水汲薪を樵て○奉公勤めて元手をこしらへ○三十年目に初て店出し○華嚴と名つけし結搆れ代呂もの○賣てミれば文珠と普賢の二人は買たが○あまり高くて其余の御客は○盲か聾か見向もせぬから是てはいゝぬと分別仕替て○阿含と名つけし安もの賣かけ○口上ひねれば店ざきせはしく御客

が來るやら得意が附やら○そこて追々代呂物仕入て○商ひ手廣に方等般若よ○法華涅槃と御客の機を見て○夫々あてかふ商ひ上手よ○須達と名をいふどもらい金持○滅法にゆれこみ祇園精舎と名を呼屋敷を○御釋迦にあてかひ店出しさしさら○早速其名が諸方へひろまり○とてつもなひ程商ひ繁盛○天上天下に一人の親仁さ譽ても訓なひ○其時妙法秘密の精藥○法華の一法盛んに流行て○御若ひ幼樣龍女と申かこれを買請とつくり呑込○成佛しらハ我等の嬶とはどえらい違ひだ○又々其時阿闍世と申さ無敵の王樣○提婆達多と心を合して○御釋迦の店をば仕舞てのけよと○已が母者人韋提希夫人を牢屋へおーこミ○御釋迦の代呂物買さぬ了簡○そこて夫人は不樂閻浮と此世を厭ふて○智惠も元手もどぎらぬけれども○五障三從かされる大病○なをも藥があるなら下され御賴申と○遙に向ふて御願なされば○御釋迦は承知で五三の桐だよ○此樣な御客が大かたあらふと○四十余年の長の月日を○御藏へ納めて仕込でおひさが○さらば是から賣かけまーよふと○阿難目連二人の手代を○左右に召連王宮さしてゆ出現なされて○韋提希夫人に彌陀の本願他力の稱名○五刼兆裁思惟の藥味を○ひとつに合した六字の丸藥○一向專念產前產後にさし合こぎらぬ○智惠も元手をさつぱり

いらない○口にまかせて唱るばかりだ○心想羸劣未得天眼○智恵が虚弱で元手のふらない○御脉も見ぬいた五障の重病○まして難治の極重悪病これらの性には○是より外には用ゆる薬はさつはりないぞと○御勸なされふ夫人は元より五百の侍女まで○無始より以來つゝり罪業○煩惱疑惑の積氣の持病に○三世の諸醫師もお匙を投ふる○其場で現益阿耨多羅〳〵○汗が流るて即日平愈○なんと皆さん六字の丸藥用てみなさい○元手のいらぬが肝心要めだ○あんはり無造作て祖父婆々だはしの店代呂物かとちつくり疑ひ○何そ利口な物はないふと知識に問ふら○直指人心見性成佛○御釋迦ら則ち莞爾と笑へば○迦葉か莞爾と笑ふた請賣○是か本法一嗣相傳實の眼を開ひて看たまへば○御釋迦も我等も是は何物○本來面目無一物とは○こりやまゝとゐらい堀だし物たと○座禪を始てやりかけましたが○膝かぶり〳〵ふりつきますから眠りかゝるやら背をどやされ大きな御目玉○爰かなんでも心抱所とさばつてこふれば○三年むゐしに隣へかしふる黒豆三合糠一升○思ひ出して忘念山〳〵○これも我等か性にあはねい○商買かよふと眞言秘密を○どの樣な物だと尋て見ふれば○阿字本不生で自身の胸にも阿字か備り○羅字は元より差別とゐかれて○五智と五大と金胎両部と○此胸一つ

で父母の腹から生れる所か○直に佛の位でごんすと聞と其儘○サンアホキヤなそとやりかけられどと元手も持ずに自力の商買○阿字なものにてさつはりしれない○そこて圓頓妙法蓮華即身成佛○扨を無上の妙劑かれとも○我等か根機に及びもなひゆへ○題目ばかりの功能看板○讀でみるを元手るかひから代呂物買をす○四十余年の末顯眞實○何の事たと求めて見されば○六字の名号は法華經の畧にて○藥王品には妙典八軸呑込時には○西方極樂阿彌陀の淨土へ生れて行そと○説てはあれそも○何も勘定た廻り〳〵て遠道せうより○路銀のいらなひ南無阿彌陀佛を願ふか近道○おんと皆さんそふではなひかへ○鼠衣で二食でくらして戒行持つは○始末勘定利口な算用○しかし我等は蚤も虱もとらずよやおあねへ○手を出して盗はせねとも○心に欲くて目あけに持るし○嫌もなければ子種がなくなる○虚も少しはつかねばならぬし○酒も呑ねば婚禮振舞○万事の附合世間が渡をぬ○何と是では五戒が持てぬ外の商賣仕様かと思へば○根機と元手がなくては出來ねい○とふでも親父の教へに歸りて○元手のいられへ六字の商賣○我等が根機よてつきり合まそ○然し元手が澤山あるから○自力の商ひをして御覧じ○細ひ元手じや一向いけなひ○棒でも折るさら逐地も去地も茶の木畑

て御迷ひなさるゝ○昔し咄しを聞てを見なさい諸宗の祖師達○智惠も元手も澤山あるゝ○六字の藥を御拾ハなさるゝぬ○まして我等ハ智惠も元手も根機もなひから○自力の壁他力の御船に○乘より外には分別御座らぬ○凡夫が其儘佛に成とは○石や瓦が不思議に變じて黃金と成のだ○夫が嘘なら御寺の坊様に尋ねて御覽じ○何と皆さん嬉しひこんだぞ儒道や神道や心學なんどの外商賣から○あきない敵ていろ〳〵さま〳〵惡口いへとも我等が親父の仕にせの商ひ○格段違ふてどゝらひもんだよ○根元本家は天竺横町○夫から唐土日本へ店出し○八宗九宗と弘めさ代呂物いやだといふたら○そこらにや居られぬ○恐れ多いか上々様ても御用ひなさるゝ六字の丸藥○朝夕忘れぬ用ひて御覽じ○四海靜かに現當繁榮子孫長久○今世の祈禱も來世の利益も○是に過ふる藥はおひぞへ○虛はつかねへ是皆御釋迦の味噌ては御座らぬ○本法の事だよホヽヲヒホウ〳〵

明和元申年十月

沙羅樹下

闡提翁述

白隱禪師　法話集卷ノ一　終

明治廿七年六月一日印刷
仝　廿七年六月七日發行

定價金拾錢

京都市下京區六角通寺町西へ入
八百屋町廿四番戸
編輯者
兼發行者　小川多左衛門

京都市上京區烏丸通三條上ル
場之町卅三番戸
印刷者　山鹿福三郎

（京都烏丸三條北點林堂印刷）